



松本清張と異文化接触 [全文の要約]

| | |
|--------|---|
| 著者 | 李彦樺 |
| 発行年 | 2014-03-31 |
| 学位授与機関 | 関西大学 |
| 学位授与番号 | 34416甲第502号 |
| URL | http://doi.org/10.32286/00000316 |

松本清張と異文化接触

関西大学大学院文学研究科博士論文 李彦樺

要旨

本論は、松本清張作品にかかわる異文化接触の問題について三つの方向、すなわち「一、清張文学の台湾における受容の状況と時代背景。二、中国や台湾に出版される清張作品の訳本にかかわる諸事情とその影響。三、外国人が登場する清張作品から見る社会矛盾と異文化接触の問題」から、考察を進める。全体として、この三つの方向にそれぞれ一章を振り当て、計三章の構成とする。

第一章「清張文学の台湾における受容」では、まだ開拓されていない清張文学の海外受容研究について着目し、資料や文献に基いて論述を進めていく。松本清張作品の海外諸国における受容を扱う評論や先行研究は極めて少ない。本章では、これまで触れられていない清張文学の台湾における受容をテーマとする。

第一節では、台湾における推理小説の発展とその状況を簡単に説明する。台湾では戦前から探偵小説創作の風潮はあったが、戦後は政府の文学政策や、中国共産党との戦争に備えるために実施した戒厳政策のために“空白の20年”と呼ばれるほどの長い低迷期があった。時代背景から生じる様々な要素を分析し、清張文学の台湾への受容を論ずる。

第二節では、60年代・70年代・80年代・90年代・2000年以降に分けて、書籍資料・出版資料などに基づき、松本清張とその作品が実際に台湾に伝播・受容される状況を考察・分析する。

第三節では、台湾人作家・出版業界関係者などのコメントや文章をまとめて整理する。それらから、松本清張が台湾の推理小説界や台湾作家・文化人に与えた影響を分析し、清張と台湾文壇との関係を論究する。

第四節は、台湾において最も重要な推理小説専門誌『推理』と松本清張の関連性を明らかにする。雑誌『推理』の創刊者林佛兒は、台湾で初めて長編推理小説を書いた作家であり、日本の推理小説を数多く翻訳・出版した林白出版社の創立者でもある。松本清張作品の大ファンであり、雑誌『推理』は長年の間、台湾で唯一の推理小説専門誌であったため、本雑誌を研究することによって、台湾の清張受容について論ずる。

第二章「訳本の問題——『砂の器』の中国語訳本研究」では、清張作品の中国語訳本の諸問題をめぐって、考察を進めていく。台湾で翻訳・出版された諸訳本を主に扱うが、中国語で翻訳される中国側の訳本も考察の視野に入れる。テキストにする訳本は、台湾で知名度が高く、なおかつ一番訳本の種類が多い『砂の器』を選ぶ。

第一節は、台湾と中国における『砂の器』の翻訳事情を、各資料を元に考察を進める。『砂の器』の原作自体が発表されたのは、1960年だが、約25年間の長い歳月を経て、80年代の半ばに台湾と中国においてほぼ同時に出版され、人気を博した。これは偶然なのか、それとも何かの事情があるのか。また、『砂の器』の中国訳本と台湾訳本の間には内容的にも一致する部分が見受けられるが、これはいったい何故なのか。時代を反映する様々な資料の分析によって、これらの疑問点を解明していく。

第二節では、実際台湾で翻訳・出版された『砂の器』の5つの訳本の比較分析に当たる。この5つの訳本の内、明らかに文字数が少ないなど、特異な訳本が存在するが、内容の比較分析によって、その理由と成立した背景を論ずる。また、各訳本の特徴についても実際の訳文の比較を通して明らかにする。

第三節では、『砂の器』の台湾訳本と中国訳本の中から、内容的に一致する部分が見受けられる台湾の徐沛東訳（志文出版社、1987年）と中国の曹修林訳（春風文芸出版社、1985年）にスポットを当て、互いの関連性と訳文の良し悪しを考察する。台湾の徐沛東訳と中国の曹修林訳とは、訳者・出版社・出版年月・出版地など、すべての条件が異なるにもかかわらず、訳文の一字一句はほぼ一致するのである。その理由と成立するまでの流れを、訳文の比較を手がかりに論ずる。

第四節は、イスラエルの学者イーヴン＝ゾウハー（Itamar Even-Zohar）が1970年代に提唱した「多元システム理論」を使い、『砂の器』の台湾訳本と中国訳本の翻訳手法に表れるストラテジーを分析し、当時の清張作品の台湾と中国における受容状況を訳文の視点から考察する。

最後に、第三章「社会矛盾と異文化—作品研究を通して—」では、外国人が登場する清張作品を数篇とりあげ、松本清張が作品を通して訴えた社会的矛盾について論究する。清張が遺した作品の数は膨大であり、扱う素材も多岐にわたるが、“社会派”と謳われる以上、社会から圧迫される弱者への共感、腐敗した権力や社会悪の暴露など、一貫した趣旨をもつものが多い。本章の研究対象として取り上げる「赤いくじ」「黒い福音」「黒地の絵」の3作品も、初期から中期にかけての作品ではありながら、こういったコンセプトが鮮明に浮かび上

がる。「赤いくじ」は軍部の腐敗を、「黒い福音」は戦後日本の国際的立場の弱さを、そして「黒地の絵」は人種差別と戦後GHQ統治体制の諸問題を、それぞれテーマとしているが、共通している部分も多い。また、外国人が登場するという点でも共通しているため、この3作を取り扱う。

第一節は、「赤いくじ」と、内容的に類似性が見受けられるフランスの作家モーパッサンの短編小説「脂肪の塊」との異同について分析し、「赤いくじ」の独創性と創作意図を考察する。「赤いくじ」は、ストーリーの構成として「脂肪の塊」と似通う部分はあるものの、作品を通して訴えたいコンセプトには根本的な違いがあることが分かる。「赤いくじ」を詳細に分析し、清張の独創性を論究する。

第二節は、1959年に実際に起きたスチュワーデス殺害事件をモデルに小説化した作品「黒い福音」をテーマとし、作品中の登場人物の人物像と実際に起きた事件の当事者との違いを分析する。この事件では犯人とされる人物がカトリック教団に所属する外国人神父であるため、捜査が難航し、最後は外国人神父の無断出国によって迷宮入り事件となる。戦後日本と外国勢力との間に生ずる矛盾と葛藤が赤裸々に描写される。報道事実と作品を比較対照することによって、清張が作品に込めた思いと趣旨を明らかにする。

第三節では、“事実をかなり忠実に反映したドキュメンタリ的小説”と見なされる作品「黒地の絵」を考察の対象とする。戦後GHQ統治体制の問題点と日本政府の無力さを浮き彫りにするために、「黒地の絵」は、ストーリー構成、描写など数多くの工夫を施している。それら小説的手法と、1950年に起きた黒人兵士集団脱走事件の経緯と作品中の設定との食い違いを探り、清張がこの作品を描いた真意を分析し、決してただ事実を反映したドキュメンタリ的小説ではないことを論証する。

以上の三章構成で、それぞれ違う角度から松本清張作品にかかわる異文化接触の問題について論じ、新たな清張像を提示する。